

大阪教育大学 受講生の感想

阪神淡路大震災のお話を聞いて、地震の災害の恐ろしさを感じた、その後の人々も家族や友達を失ったの悲しみさも感じた。そして災害では道や橋やビルなどが壊れ交通も不便になる。そして、人間は災害の前でできることは少ないと感じた、そのため、最低の防災意識を揃えそして。災害に会ったときどう逃げることを集中するべきである

第4回の授業において、三好さんの阪神淡路大震災のお話で印象に残ったことは災害関連死や神戸新聞の7日間という映画と災害後の画面を見ることです。地震が発生する時に、何かの予告もなく、いきなり大地が揺れ、建物が崩れました。その画面を見たことから、人間が災害が発生するときに、抵抗までできない姿に対して、悲しみを感じさせました。それから、災害が発生した後で、消防車が来ないことや水が出ないなどの支援の遅れだし、電気、通電火災、工場火災もあるし、人々に絶望をもたらされるので、たくさんの方が自殺にしました。災害の怖さをさらに痛感させました同時に、普段の生活の中で防災意識を高めることが如何に重要であるかを思い知らせました。

三好さんの阪神淡路大震災の話聞いて、一番強く感じたのは、自然の前では人間の力がいかにかちっぽけなことだ。建物が倒れ、道路が裂け、日常が一瞬で崩れる様子を想像しただけで、背筋が凍る思いがした。

もう一つ胸に刺さったのは、国籍を超えた被害の現実だ。三好さんが「中国人の同胞も犠牲になった」と話してたとき、災害は国境なんて関係なく、全ての人を平等に襲うんだって実感した。例えば、留学生や働きに来てた人たちが、言葉や文化の壁に苦しみながらも必死で生き延びようとした話は、他人事じゃないって思わせた。

でも同時に、人々の助け合いの姿にも心を動かされた。水や食料を分け合う住民、がれきの下から人を救おうと必死になるボランティア……そういう「人間の強さや優しさ」が、絶望の中に光を見せるんだなって。震災から復興までの道のりは長かっただろうけど、その過程で生まれた地域の絆は、今でも神戸の支えになってるんじゃないかと思った。

今回の授業は阪神淡路大震災と他の地震と津波について詳しく勉強した。私は特に地震後の救援に対する考えた。日本政府は長年に自然災害への教育や地震を防ぐための建物に力が入れてきた。その結果、地震被害の死者数は大きく減少している。しかし、能登半島地震のような地方の小都市では、支援が遅れ、救援の多様性も不十分であると感じた。

今の支援には、最低限の生活を保障するだけだ。病気がある人や、心理問題に対する心理的な支援はまた課題である。今後は、小都市に対する早く助けが届くようにしたり、震災後の医療、心の病気も含む「多面的な支援」が必要と考えている。

今回は、三好さんから阪神・淡路大震災についてのお話を聞いた。記者としての視点から地震を語っていただき、地震に関するさまざまなことを学ぶことができた。

実際には、地震は直接的な被害をもたらすだけでなく、地震をきっかけに他の災害を引き起こし、それによって被害がさらに拡大することがある。たとえば、火災や津波、土砂崩れなどがそれにあたる。

特に、通常の火災と違って、地震発生時の火災は被害がより広がりやすい。その原因として、地震の影響で消防車が来られなかったり、水道が止まったりすることが挙げられる。こうした理由から、大きな被害につながってしまった。

しかし、近年では人々の防災意識の向上や、政府による防災政策の整備が進んでおり、こうした災害による被害は徐々に減少している。

このように、安心して暮らすためには、防災に関する知識をしっかりと身につけておくことが重要だと感じた。

授業で三好さんから聞いた阪神淡路大震災のお話の中で特に印象に残ったのは、被災後の混乱の中でも人々が助け合いながら生活を立て直していった姿です。電気や水道が止まり、情報も限られていた中で、近所の人たちが声を掛け合い、助けを求め合ったという話に心を打たれました。また、「神戸新聞の 7 日間」で見た新聞記者たちが、命の危険を感じながらも紙面を出し続けた姿にも感動しました。人々の強さとつながりの大切さを改めて感じました。

今日は神戸新聞の記者、三好さんが地震に関するお話をしてくださいました。授業の最初に先生が 2008 年の中国・四川大地震について紹介し、続いて 2024 年の阪神地震や能登半島地震についても触れられました。地震の後には避難所に簡易な施設が設置されますが、支援スタッフの不足や、地震による火災に対する救助が難しいといった多くの問題も発生します。

三好さんは阪神大震災の経験者であり、授業の中で「なぜ以前の地震による津波に比べて、阪神大震災の死者数は少なかったのか」という問いを投げかけました。阿倍野防災センターでみたドキュメンタリーの中では、東日本大震災の際、政府機関が津波警報を出したにもかかわらず、多くの人々がそれを信じなかったために被害が拡大したことが描かれていました。

それに対して、阪神大震災での死者数の減少は、現代人の防災意識が高まっていることを証明していると思います。私たちも日常生活の中で、防災意識を高めていくことが大切だと感じました。

授業で心に残ったのは、三好さんの「語り続ける」という言葉と、阪神淡路大震災の体験を通して語られた「人と人とのつながり」の大切さです。当時の状況を知らない世代だからこそ、災害の記憶を受け継ぎ、語り続けることの意義を強く感じました。さらに、授業の中で紹介された2024年の石川県の地震では、防災意識の高さが津波による被害を最小限にとどめたという話も印象に残りました。人々が日頃から備えていたことが、多くの命を救ったという事実は、私にとっても大きな学びでした。この授業を通して、私は「過去から学び、未来を守る」という防災の本質を改めて実感しました。防災は「知っているかどうか」ではなく、「準備しているかどうか」が命を左右するのだと痛感しました。「備えにはゴールがない」という言葉の通り、防災は一度やって終わりではなく、常に見直し、アップデートし続けるべきものだと思います。

今回の授業で特に印象に残ったのは、「当たり前前の日常が一瞬で失われる」という現実だ。動画で地震の前は普通の日常だが、早朝に突然起きた地震によって、多くの人が家を失い、大切な命が奪われた。また、被災者同士が協力し合い、全国から支援の手が差し伸べられたことで、少しずつ希望を取り戻していく姿にも注意した。この災害を通じて、日頃から防災意識を高めることの大切さ、そして「助け合い」の精神がどれほど力になるのかを改めて考えさせられた。過去のことを忘れず、未来の災害に備えていく必要性を強く感じた

三好さんの阪神淡路大震災のお話を聞いて、衝撃を受けたのはその破壊の規模とスピードだ。「ガラスが瞬間に割れた」「神戸は燃え続けている」というからは、突如として日常を襲った災害の残酷さが伝わってくる。特に橋脚が折れた阪神高速道路の映像は、都市インフラの脆弱性を露呈した象徴的な光景として記憶に残っている。さらに、『神戸新聞の7日間』というドラマから、直観に阪神淡路大震災の破壊性にショックした。建物の倒壊だけでなく、火災の拡大や救助活動の困難さが二次被害を拡大させた。

震災後、被災者生活再建支援法や介護保険制度が整備されたことは、この経験が社会を変えた証だ。しかし「72時間の壁」という言葉が示すように、救助の時間制限や初期対応の重要性は今も変わらない。南海トラフ地震への備えにおいても、この震災の教訓は生き続けるだろう。災害は過去のものではなく、未来への警鐘として受け止める必要があるということ気づいた。

子供の頃、四川大地震経験者のピアノ先生から詳しい経過を聞いたことがある。しかし、地震の怖さについて事前に知っていたのに、今回の話を聞いたらすごく恐ろしいと思った。一番印象的だったのはビデオの地震発生時の状況だ。一瞬で揺れ始めて反応できた時から逃げるなんてもう出来ない。地震発生後、みんなは助け合う場面は本当に感動した。今回の話しを通して、地震はいつでも来るかも知れないと真剣に意識し、自身の安全のためにも地震について知っておく必要があると思った。ということで、これからの生活で地震の準備を少しでもやるつもりだ。

今回の授業三好さんの共有について、深刻な印象を残りました、地震の災害は想像より大きくて、特に神戸は身近ところだから、いつも見慣れた場所があんなに大きな地震で、あんなに壊れてしまうなんて、本当にショックだった、そして、三好さんは地震の影響と怖さしか言わないではない、日本政府の不準備なところとまだ存在している問題にも詳しく話しました、橋の安全神

話の崩れる、消防の来ない火事、72 時間の壁、そうみたいな問題よくわかりました。いい授業だったと思います。

三好先生の阪神淡路大震災のお話を聞いて、私が最も印象に残ったのは、まるで目の前で起きているかのような凄惨で痛ましい当時の地震の状況だけではなく、自然災害の前では人間の命がいかに脆いか、日本の安全神話が建物のように崩れ落ちること、そして幼い命が永遠に止まってしまったことといったことです。すべての写真やビデオ、音楽が、防災意識の大切さを強く訴えかけているように感じました。

特に胸に刺さったのは「災害関連死」という言葉です。医療を受けられずに亡くなったお年寄りや、家族を失った悲しみに耐えきれず自分の命を絶った人々の気持ちに、深く共感できるように思いました。

当時の新聞社の方々のご苦労にも感動しました。安心できる情報(どこできれいな水がもらえるなど)を届けるために奔走しながら、同時にニュースの信頼性をしっかり把握しつつ、失われた命を一つひとつ丁寧に新聞紙で数字に刻み続ける姿には、心から敬服しています。

そして何より心に残ったのは、励ます新聞記事で、絶望の中で希望を見つけようとする人々の姿です。壊れた街の瓦礫の中から新たな美しさを探し求めることから、災害は多くを奪いますが、決して奪えないものがあると気づかされました。それは、困難に立ち向かう勇気、幸せを求める気持ち、そして生きる希望そのものなのだと感じます。

今回の授業を通して、三好さんからの阪神淡路大震災に関するお話を伺いまして、とても実感しました。最も印象を残したのは「神戸新聞の七日間」という映画を見ていただいて、当時地震の惨烈さと防災意識を上げるの大切さをよく分かりました。また、神戸新聞みたいな新聞記者の職業に関する認識も大きく変わりました。また、災害時に冷静に正しい情報を得ること、そしてそれを支える人々の存在の大切さを改めて学びました。今回の授業をきっかけに、日常生活の中でも防災意識を意識的に高めていこうと思いました。今後は自分も家族や友人と防災について話し合いたいと感じました。

神戸新聞の記者である三好さんが阪神・淡路大震災について詳しく紹介してくれました。彼の話を通じて、私はこの恐ろしい地震についてより深く知ることができました。特に、当時の状況や人々の反応、そして亡くなった方々の数など、これまであまり知らなかったことを多く学びました。三好さんは、被災地で実際に取材を行った経験をもとに、多くの写真や資料と映画を見せながら説明してくれたので、とても現実感がありました。今回の話を聞いて、地震の怖さだけでなく、人々の強さや連帯感の大切さも改めて感じました。

今後、災害に備える意識を高め、自分自身ができることを考えて行動していきたいと思います。

神戸新聞の三好さんから、阪神淡路大震災のご経験についてお話を伺い、大きな衝撃を受けた。実際に被災地で取材された方の話は非常に生々しく、当時の状況がリアルに伝わってきた。私は日本に来てから初めて震度4の地震を経験し、その揺れだけでもとても怖かった。阪神淡路大震災の揺れと被害は想像を絶するものであったと改めて感じた。また、記者として人々の声を伝える使命の重さにも深く心を動かされた。今回の授業を通して、災害の恐ろしさだけでなく、報道の在り方や人間の強さについても学ぶことができた。